特集３

特集趣旨

大　谷　いづみ
（立命館大学産業社会学部／生存学研究所）
川　端　美　季
（立命館大学衣笠総合研究機構）

本特集は、2023年１月に実施された、2022年度生存学研究所企画の立命館土曜講座「障害のある先生が仕事を続けるということ――障害と教育の交わるところ」の記録である。発端は、大谷いづみが、所属の産業社会学部教授会で紹介された立命館学園関係者のメディア出演情報で、出口治明立命館アジア太平洋大学（APU）学長が2021年１月に脳梗塞で重度の麻痺と失語症に見まわれながら、翌2022年３月に学長職に完全復帰されたことを知ったことに始まる。APUと立命館は学生の交換留学プログラムもあり、また、コロナ禍直前の2020年２月には、大谷と川端美季が携わってきた移動アクセシビリティ研究が目にとまり、APUの担当部局職員の方の来学も予定されていた。ただしこれはコロナ禍により職員の来学はかなわず担当業者の方のみの来学となった。さらに、2022年２月からは、長瀬修生存学研究所特別招聘教授（当時）の尽力もあり生存学研究所執行部教員による冬セッションの集中講義「特殊講義共通教養科目」（生存学）が開講されている。

その後間もなく、出口学長の発症から１年余に及ぶリハビリを経て復帰に至るまでを描いた『復帰への底力』が出版された。大谷は突き動かされるような思いで、出口先生にビデオメッセージでご出演いただき、「障害のある先生」の雇用継続をテーマに土曜講座でシンポジウムのようなものができないかと提案し、生存学研究所の執行部会議で検討がはじまった。研究部の北波正衛課長に仲介の労をとっていただき、出口先生からテキストメッセージをいただけることになった。もうひとりの発表者には、川端の推薦で「障害教師論」の研究を続けている中村雅也氏に決まった。

このように今回の土曜講座のすべりだしはよかったものの、その後は、大谷にとっては、産みの苦しみだった。土曜講座案内の「講座エッセイ」ひとつ書くのにも四苦八苦し、悩んだあげく川端とのブレインストーミングを繰り返し、年末年始に法制度を勉強し、講演当日の１時間前まで悩んだあげく、報告１のような形になった。しかし、質疑応答で次々と出される切実な事例を前に回答に窮し、川端がその葛藤を代弁し、さまざまなアプローチから回答した。終了後のアンケートには、次々と出される質問の深刻さと、容易には答えられないことそれ自体に、「障害のある先生」が仕事を続けていくことの困難が、参加者それぞれの視点で綴られていた。

大谷が大学を卒業して高校教師の職に就いたのは1983年４月のことだ。高校・大学とあわせて今年でちょうど40年になる。そのうち多くの期間を生命倫理の諸問題に取り組んできた。乳児期にポリオに罹患した後遺症で大谷の両下肢に障害があるのは生徒の目にも自明だったはずだが、なんどか、「この授業はクラスに障害者がいたらできない授業」という受講生のリアクションを経験して来た。その度に、「え？わたしは？」と思ったものだ。

たしかに、高校教師になって生命倫理教育にとりくみはじめたころは、Ｔステッキも必要なかったし、装具を外したら一歩も屋外を歩けたことはなかったが、チノパンツでもはけば、ロックした長下肢装具で右膝が曲がらないことを除けば、上体を左右に揺らしながらも右足を引きずって歩く程度にしか見えないかもしれず、そのような学生の反応になるのかもしれない。報告２で中村が述べているように、そんな姿に、学生もやがて「慣れて」いくのだろう。

授業で取り上げた生命倫理のトピックである、出生前診断と選択的中絶の対象となる障害胎児や、ナチス政権下ドイツの「安楽死」政策で組織的に虐殺された30万に及ぶ心身障害者・難病者の列に、教師である眼前の大谷が連なると、学生には実感しづらかったかもしれない。だが、実際には、軽微な障害が理由で選択的中絶の対象となったり、障害や難病が「「安楽死／尊厳死」や幇助自殺の理由となったり、ひとたび大災害や戦争となるや瞬く間に「足手まとい」「やっかいもの」とまなざされかねない現実がある。

このエピソードには検討すべき多様な論点が存在するが、とりわけ生命倫理のような「障害／者」の処遇と直結する授業内容と、教室における「障害のある生徒／学

生」と「障害のある先生」、授業の問いの設定とこれを問いかける教師の「障害」の有無との距離を確認しておきたい。それは、生命倫理の諸テーマにおける「障害 / 者」をめぐる「現実」と「自分ごと / 他人ごと」の距離を検討する、ひとつの指標であるともいえる。また、「障害のある先生」と「障害のあるクラスメイト」が教室の場で「障害 / 者」がどういう存在であるかを「自分ごと / 他人ごと」として考える、ひとつの指標にもなるだろう。大谷が立命館で開講した「生命倫理学」「いのちの教育」を2016 年度からひきついだ川端は、大規模施設で暮らしたこともある重度障害当事者をしばしばゲスト講師として授業に招いている。学生たちは、これまで講義で学んできた歴史や政策が現実と地続きになっていることに、ここで初めて気づくことも多い。学んできたことが机上のものやすでに終わったことなどではなく、リアルな現実として目の前に立ち現れるのである。「障害 / 者」をめぐる「現実」と「自分ごと / 他人ごと」の距離を小さくしていくことは、この特集の、そして生存学の目指すところでもある。

GCOE「生存学」拠点センターができた 2007 年度から、生存学では、しばしば土曜講座で「障害」をテーマに企画してきた。土曜講座の過去開催一覧から確認できる限りでは，生存学センター／研究所の企画と銘打っているものは、2007 年度、2017 年度、2019 年度、2021 年度、2022 年度、2023 年度。2012 年度、2013 年度は、生存学の企画と推測されるものである。2014 年度、2015 年度には生存学関係者が報告している。コロナ禍で中止になった 2020 年度 5 月は過去開催一覧からは削除された幻の企画で、その 2 ヶ月後の 7 月に研究所の主催で代替企画を実行した。なお、2017 年度・2019 年度は情報保障の事前申込制を実施し、2021 年度は事前申し込みなく情報保障を実施した。これを受けて 2022 年度には全講座での文字通訳が試行され、2023 年度の常設につながった。2019 年度の石川准氏来学にあたっての同行支援、2022 年度の中村雅也氏報告にあたっての資料作成や講演補助に土曜講座から経済的な対応が行われたことも記しておきたい。

オンライン開催されるようになった 2021 年度以後の土曜講座でわたしたちが心を砕いてきたのは、質疑応答を含めた講座の空間に、セーファースペース Safer Space を創り出すことだった。名も顔も出すことのない匿名性の担保されたオンラインの「場」は、一歩間違えば「論争」を超えた炎上や躊躇のない攻撃を招きかねない。「障害」をテーマにした生存学の土曜講座は、講演者だけでなく参加者にも障害当事者が多い。攻撃的な質問は、障害のある参加者への抑圧になり、障害の有無を問わずセミナー参加者をも萎縮させることにつながる。古くからの土曜講座ファンからは、この微妙な変化を敏感に感じ取って憂えたご意見も寄せられた。報告 1 で述べたような苦い経験を機に研究部土曜講座事務局とも協議をかさね、現在も、事務局と連携して毎回細心の注意をはらっている。

末尾の土曜講座一覧の表には、コロナ禍で中止され、過去開催一覧から削除された幻の企画も掲載した。そこには同年暮れに急逝された、NPO 法人「ゆに」代表で、本学産業社会学部校友でもあった故佐藤謙さんのお名前がある。2021 年度に登壇された木島英登さんも、翌年、ご遺族から突然の訃報がとどいた。生存学客員研究員で、2022 年 12 月に急逝されたマーク・ブックマンさんもあわせて、障害者の方々が命がけで日常生活を送り仕事に携わっていることを、あらためて思い知らされる。そうしてこのことは、今や教員という職業が「ブラック」とさえ称されて誰もがいつ何時、思いがけない事故や病気で「障害のある先生」となる可能性を持っていることを暗喩している。これは同時に、それでもなお、教育の場で「障害のある先生」の存在そのものが共生社会への「隠れたカリキュラム」となるには、何が社会的障壁であり、それをいかにして除去しうるかという、「障害者のある先生」の雇用継続の課題と地続きの問題である。そしてまた、「働くこと」と「いのちの尊厳」という、俗に「優生」という言葉で括られる問題群にもつながっているのである。

※本特集にあたって、テキストメッセージの掲載をご快諾くださった出口治明 APU 学長をはじめ、仲介していただいた APU 学長室の方々、土曜講座事務局、生存学事務局の方々、本土曜講座の記録を残すことに即座に賛意を表してくださった研究部の北波課長、これまで報告して下さった方々、土曜講座に参加して下さった方々に、あらためて謝意を表したい。

表　生存学企画及び生存学関連の土曜講座一覧
※企画担当研究所の土曜講座 HP 記載は 2015 年度 3 月以降

■ 2007 年度：2007 年 4 月テーマ：「生存学」の創成 ―障老病異と共に暮らす世界へ		
4 月 7 日（第 2808 回）	先端総合学術研究科准教授 天田城介	老い衰えゆくことをめぐる困難 ―何がいかに問われたのか？
4 月 14 日（第 2809 回）	産業社会学部教授 大谷いづみ	「よく死ぬ」ことと「よく生きる」ことの「間」―「尊厳死」言説をめぐって
4 月 21 日（第 2810 回）	立命館大学 COE 推進機構教授 林達雄	エイズとの闘い―世界を変えた人々の声
4 月 28 日（第 2811 回）	先端総合学術研究科教授 立岩真也	生きて在るを知る―「生存学」という企み
■ 2012 年度：2012 年 11 月テーマ：精神分析の古典を読む　フロイト・ユング・エリクソン		
11 月 10 日（第 3036 回）	立命館大学生存学研究センター特別招聘教授 やまだようこ	エリクソンの人生と『老年期』
11 月 17 日（第 3037 回）	神戸市外国語大学外国語学部教授 村本詔司	『ユング自伝』を読む
11 月 24 日（第 3038 回）	立命館大学先端総合学術研究科教授 西成彦	フロイトの現代性－子供がぶたれる世界の構造
■ 2013 年度：2013 年 5 月テーマ：性の倫理、生殖技術の倫理		
5 月 4 日（第 3054 回）	立命館大学先端総合学術研究科教授 西成彦	『からゆきさん』を読む～孕ませる男の性～
5 月 11 日（第 3055 回）	立命館大学先端総合学術研究科教授 松原洋子	出生前検査は誰のためのものか～技術の倫理を考える～
5 月 25 日（第 3056 回）	東京理科大学理工学部講師 堀田義太郎	性と生殖の倫理学～望まない妊娠に対する男女の責任～
■ 2014 年度：2015 年 3 月テーマ：対人支援の新たな地平～社会的包摂に向けて		
3 月 7 日（第 3121 回）	立命館大学大学院先端総合学術研究科教授 立岩真也	唯の生 ～
3 月 14 日（第 3122 回）	京都府教育委員会認定フリースクール「アウラ学びの森 知誠館」代表 北村真也 立命館大学産業社会学部教授 中村正	不登校問題の解決とは何か―修復的支援と社会的包摂―
3 月 21 日（第 3123 回）	立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員 石川眞理子	双方向の高齢者支援―脳を鍛える「音読・計算活動」からみえてきたもの―
■ 2015 年度：2015 年 5 月テーマ：入門シリーズ ～「支え合い学び合う」科学を学ぶ		
5 月 9 日（第 3128 回）	立命館大学先端総合学術研究科教授 松原洋子	情報アクセシビリティ入門―読書権と障害者への配慮
5 月 16 日（第 3129 回）	京都府立大学公共政策学部准教授 中根成寿	社会病理・社会問題を学ぶ―臨床社会学のすすめ
5 月 30 日（第 3130 回）	立命館大学文学部准教授 中鹿直樹	教えることと学ぶこと―障がいのある生徒への就労支援の実践から
■ 2017 年度：2018 年 2 月テーマ：障害／社会　※情報保障事前申込み		企画：生存学研究センター
2 月 3 日（第 3228 回）	立命館大学生存学研究センター客員研究員／認定 NPO 法人 DPI 日本会議副議長 尾上浩二	障害者運動と法制度の現在―障害当事者の立ち上がりから障害者権利条約批准まで
2 月 10 日（第 3229 回）	立命館大学生存学研究センター客員研究員／大阪市立大学非常勤講師 松波めぐみ	公正な社会を阻んでいるものは何か―障害者差別解消法と合理的配慮概念を手掛かりに
2 月 17 日（第 3230 回）	立命館大学生存学研究センター客員研究員／名古屋市立大学非常勤講師 河口尚子	障害女性の生きづらさに向かい合う
■ 2019 年度：2019 年 5 月テーマ：障害者権利条約の現在　※情報保障事前申込み		企画：立命館大学生存学研究所
5 月 11 日（第 3277 回）	立命館大学生存学研究所教授 長瀬修	東アジアと障害者権利条約―中華民国（台湾）の独自の取り組み
5 月 18 日（第 3278 回）	静岡県立大学国際関係学部教授／東京大学先端科学技術研究センター特任教授 石川准	2020 年の障害者権利条約初回日本審査に向けて

■2020年度：5月テーマ：移動アクセシビリティの課題と未来　※コロナ禍で中止　企画：立命館大学生存学研究所		
5月16日（第3311回）	NPO法人ゆに代表 佐藤謙	バリアフリーマップをつくるとは
5月23日（第3312回）	立命館大学生存学研究所客員研究員／大阪市立大学非常勤講師 松波めぐみ	バス乗車拒否問題から考える合理的配慮
5月30日（第3313回）	立命館大学産業社会学部教授 大谷いづみ 立命館大学衣笠研究機構准教授 川端美季	移動アクセシビリティの実践―欧米亜における比較
◆生存学研究所　2020年度土曜講座代替企画：ウィズコロナ／アフターコロナのアクセシビリティ		
7月5日（日）	生存学研究所特別招聘教授 長瀬修	開会挨拶
	NPO法人ゆに	オンライン授業におけるアクセシビリティ
	生存学研究所客員研究員 松波めぐみ	外出や移動を「権利」にしていくために
	立命館大学産業社会学部教授 大谷いづみ	移動・情報／教育・労働のアクセシビリティ―＜障害児・学生＞と＜障害のある教員＞の経験から
	生存学研究所所長 立岩真也	閉会挨拶
■2021年度：2021年6月テーマ：アクセシビリティの課題と未来―ウィズコロナ・アフターコロナの時代にむけて　企画：立命館大学生存学研究所		
6月12日（第3335回）	バリアフリー研究所代表 木島英登	移動する権利・移動できる権利―コロナをきっかけに「手助けが必要な人」からの脱却
6月26日（第3336回）	NPO法人ゆに事務局長 田中結子 NPO法人ゆに事務局 安田真之 他	「オンライン化」のその先へ―障害当事者が語るアクセシビリティ
■2022年度：2023年1月テーマ：「障害のある先生が仕事を続けるということ―障害と教育の交わるところ」　企画：立命館大学生存学研究所		
1月14日（第3373回）	立命館大学産業社会学部教授 大谷いづみ	「障害のある教員」の職場復帰のプロセスと課題
1月21日（第3374回）	東京大学先端科学技術研究センター特別研究員 中村雅也	「障害のある教師」からインクルーシブ教育を問い直す
■2023年度：2023年4月テーマ：「障害者権利条約の初回審査と総括所見」　企画：立命館大学生存学研究所		
4月8日（第3379回）	静岡県立大学名誉教授 石川准	障害者権利委員会総括所見はなにを求めているか
4月15日（第3380回）	自立生活センター神戸・Beすけっと事務局長 藤原久美子	障害女性の課題をメインストリームに！

立命館土曜講座開講講座一覧（https://www.ritsumei.ac.jp/doyo/essay/）等より作成